

# 平成27年度外部評価結果

外部評価委員会健康・栄養研究分科会  
平成28年4月19日（火）実施

	栄養疫学研究部		健康増進研究部		臨床栄養研究部		栄養教育研究部	
	コメント	評点	コメント	評点	コメント	評点	コメント	評点
委員A	摂取基準策定のためのエビデンスが不足している。集計結果の解釈とその応用が不十分である。一般の方への還元の方策が不十分である。	2	身体活動と栄養の相互作用に関する適切な調査がなされている。NEXISの銃弾研究の結果は期待できる。アクティブガイドの普及活動が不十分である。	4	代謝異常のない肥満者と腸内細菌の関連は着眼点が面白い。サンプル収集状況も良好である。インフラ整備も評価できる。	5	高齢者コホートの結果は期待されるが、これまでの解析成果は新規性に乏しい。米飯に関する研究は更に進めるべきである。その適切な評価方法はかなり難しいと思われるが、調査数の多い国民健康栄養調査は期待できる。	3
委員B	食生活の調査集計が十分に行われている。周産期エビゲノムの体系解析をスタートさせているのは面白く、これからの成果が期待される。学術的業績は十分出ているが、一般対象への見える化のレベルは如何。効率的な集計、調査の高度化が十分に行われている。	5	肥満と糖尿病との関連等テーマの取り出しがユニークで面白い。アスリートレベルの解析は面白いが、一般人への予想等に繋げると良い。健康増進のための運動種目なども将来的には出せると面白い。各研究を基に研究者を育成している。若手を受け入れての育成が行われている。発表業績は十分。	5	糖尿病と遺伝子の関連に加え、肥満でも良いケースでの腸内細菌と炎症との関連を出しているのは評価できる。さらに総合的ケースの結果に纏めると面白いのでは。面白い成果ですので、将来的に予防を総合的に対応できる指針ができるのを期待したい。	5	栄養疫学的な内容からいくつかの成果を出していることは評価できる。食育推進基本計画の推進に十分寄与している。今後の推進への方向性も考えることがより必要になってきていそうである。	5
委員C	少ない職員で2大事業を良く進めている。中長期計画が7年と長いので、その都度最新の手法等を積極的に導入して欲しい。	4	非常に多くの共同研究を行っていることは評価できる。NEXISをはじめ研究成果の国民へのもっと多く、もっと分かり易い発信が必要。工夫して頂きたい。シナジー研究の成果に期待活動量計の評価について、PATの取得あるいは企業との共同研究はできないか。規準化、国際標準化も重要。	5	メカニズム研究成果を最終的な目的である食事や栄養に結び付けるストーリーを見せて頂ければもっとアピールできる。例えば、栄養療法研の素晴らしい基礎成果を「療法」に繋げるストーリーをセットで説明すると説得力が増す。「健康な肥満を明らかにする」という説明はキーワードとして使えるのではないか。	4	米飯と糖尿病リスク研究は他の部で行っても良いのではないか。「食育」の研究とは何かを再検討してはどうか。増員または他部との統合再編が必要ではないか。	3
委員D	厚生労働省への施策貢献が大きい。Web調査、集計表などIT技術の活用が著しい。国民に情報が届くための工夫がほしい。分析、実施、企画など計画的に遂行できている。学術誌への投稿が順調である。運動習慣については他の研究部と連携して対策を考えられないか。健康21 中間評価への提言が期待される。	5	多くのコホート研究と連携して、特に身体活動基準2013改定にまつわる様々なエビデンスが創出できている点が素晴らしい。SNSも活用して情報発信腸内細菌に関するNEXIS研究がシナジー効果をもたらしたことが分かった。成果が評価される。研究者育成に資する点が明確になると良い。基盤研とのシナジー効果が注目される。	4.5	炎症と代謝異常の関連に焦点を当て、生活習慣との関連を解明してゆくことに意義がある。バイオインフォマティクスに関する理研との連携が期待できる。得られた研究成果の学術的な意義が大きい。生活習慣病予防施策に関連した研究テーマが設定されている。栄養疫学の視点が明確になるとなお良い。遺伝学手法を用いた高度な臨床研究となっている。	4.5	二重標識水による手法が活用されている点は評価できる。食事摂取基準にも生かされている。タンパク質の必要量に関する提言に結び付いている点が評価できる。健康な食事という観点を意識して研究デザインが組み立てられている点は評価できる。アプリの開発など国民に役立つ。食育研究というテーマが絞られている。米飯に関する評価が着眼点が良い。食育研究法が十分確立されていると言いつても良い一般的な背景の中で、どのように研究テーマを設計していくか。併任の多い部となっているので、専任研究員の充実が望まれる。	4.2
委員E	国民健康栄養調査の結果がいろいろな形で検索できることは評価できる。日本人の貴重なデータであり、有効に使えるようになることを期待する。周産期エビゲノムの体系的解析は2年に限らず思春期まで続けて欲しい。総合的に評価できる。	4.7	青少年のスポーツはやりすぎることが多い中、青少年を対象としたスポーツ活動と体の痛みの調査は評価できる。青少年を指導する人たちに情報が伝わるように進めて欲しい。全身持久力と中心性肥満との組み合わせとQOLに関する研究は日本人に対する研究も検討して欲しい。大規模介入も多数行われており評価できる。	4.5	日本人に対する研究が蓄積されており評価できる。達成度も高く継続して欲しい。科学的なメカニズムの解明が進んでおり評価できる。食事や栄養素にまで繋がる所まで続けて欲しい。	4.6	研究の少なかった高齢者に対する調査が多くなされており評価できる。高齢者は個体差も大きいので、もう少し区分ができれば良いと思う。食育を若い世代にも広めることが期待されていることからスマホアプリの活用は効果が期待できる。「日本人の健康な食事」の提言に資する研究成果を期待する。	4.2
委員F	栄養調査を順調に行っている。食事摂取基準はもっと集約化が図れるのではないか。	4	健康、特に運動の面からまとめている。高齢者、アスリートに限らず一般的に必要な運動を示すことも是非考慮願いたい。	4	疾病の根本を見据えて研究している点。食事因子を是非関連させてほしい。このまま基礎研究の継続を。	5	高齢者のたんぱく質に絞って研究成果を出している点は評価できる。静岡スタディ、亀岡スタディを進展させることを望みたい。テーマを絞っている点は評価できる。精白米と糖尿病の関係だけを検討している点は疑問である。精白米と他の疾患並びに組み合わせの検討をお願いしたい。食育は広い範囲を含んでいるので視点を絞った上での成果を期待したい。	4
委員G	日本が世界に誇る国民栄養調査の結果、分析が実際に社会で生かされる段階を期待します。迅速な対応ができている。調査方法の改善が進んでいる。周産期エビゲノムの体系的解析の追跡に期待します。人の一生(健康問題)は生まれる前から決まっているとすれば、若い女性の日々の暮らし方が自分一人の問題ではないことに気づくはずで	4	NEXISの縦断研究成果は有意義かつ興味深い。シナジー研究、腸内細菌のデータベース作りはご苦労なことですが、興味深い。基盤研との共同だから進められることと思う。アスリートの研究と一般人との研究は比較になるのかどうか。アスリートをさらに強くするための研究は別のところで研究することだと思う。活動量計などの測定のための機器の精度などの話題になると、では、その成果は評価できるのかと疑問に思います。共同研究が多数ありますが、人材は十分なのではないでしょうか。米軍関係者フィットネス研究、なぜ人種的に違うアメリカ人しかも特別に訓練した集団の研究が必要でしょうか。	4	日本人100名、肥満だが代謝異常のない男女の臨床研究、特に腸内細菌叢を介した肥満、2型糖尿病の発症機構を解明に期待します。健康な肥満者の臨床研究の成果に期待します。	4	国民栄養調査結果の活用例として、高齢者のたんぱく質摂取量の現状等がありましたが、実際の食生活をどう改善するかにも繋げて欲しいと思います。食育の幅が広くて、何を対象とするか、ご苦労が多いと思います。食育基本法の内容が幅広く曖昧で、的を絞り、と思います。米食と糖尿病リスクが高まる(特に女性)のは、米を主食としてきた民族として大変なことだと思います。食事は複合的なものですから、何をいつどう組み合わせさせて食べた結果、こうであったという研究に進めて欲しいと思います。	3
		28.7		31.0		32.1		26.4

基礎栄養研究部		食品保健機能研究部		情報センター		国際産学連携センター		委員別 平均
コメント	評点	コメント	評点	コメント	評点	コメント	評点	
高齢者における活動度の正確な評価は極めて重要である。この1年間の成果が期待より少ない様である。	2	多方面から妥当な研究が試行されている。	4	健康食品の情報データベースの継続は極めて重要である。総アクセス数の増加は評価できる。	3	生物統計に係る研究に新規性が認められない。センターとしての戦略、目標を持つ必要がある。	2	3.1
定量的評価法提案への準備データが用意されている。これからの成果を期待している。国の公衆衛生施策に寄与しつつある。	4	良く取り組みがなされている。総合評価をすべく努力されている。	5	調査の手法はうまく作動していることがよく分かり、有効な情報整理がなされている。成果発表、活動紹介をうまく努力して行っている。	5	国際交流機能を多く進めているところは評価できる。成果知見の部分が十分に行われているかどうかよく見えなかった。ある程度の成果を挙げているのが分かる。アジア太平洋における連携で何が強化され、ネットワーク化されたのであろうか。	4	4.8
マウスの結果がどのように人へ展開できるのか説明があると良い。様々なコホート研究、AMEDの準備、論文執筆など評価できる。加速度計(活動量計)等評価法の妥当性確保は必須。健康増進部との共同研究も考えられないか。	4	部のミッションに合致した研究が行われており評価できる。十分な活動が行われている。行政対応、研究共に部の目標を十分に満たしている。	4	安全声優構成データベースは非常に有効、我が国唯一。質を維持したまま継続すべき。情報発信については、非常に高いレベルで行われている。情報セキュリティについては、異質の業務、外注等は考えられるか。積極的なPRが必要。	5	多様な国際対応、生物統計の研究成果、共同研究棟、センターとして十分な活動を行っている。最終的な目標やロードマップの説明があると分かり易い。	4	4.1
主要栄養素の摂取方法に評価を絞って、肥満改善効果を明らかにした点は評価できる。運動の効果も明らかになった。身体活動レベルに関して、レビュー研究によって推進に繋がっている。運動と栄養の相乗効果について検討を進められたい。少ない人員の中で研究成果が上がっている。この努力が国の施策に寄与し、研究者の育成につながっていると考える。基礎代謝に関する研究機器(二重標識水)が整備されている強みを生かして身体活動に関する研究を健康寿命の延伸に貢献して頂きたい。	4.1	消費者庁の請負業務を行うことにより十分に機能している。国や社会のニーズに応えられるよう、分析方法などの検討が着実に進められている。学術水準が十分に高い。分析法に関する研究が充実している。収去試験の実績が積み重なると良い。	4.8	情報発信、情報提供に関する取り組みが優れている。ITを活用して、国や社会のニーズを把握している点が高く評価される。報告例に係れた実験が分かったことは意義が大きい。健栄研のHPの運営と情報開示が積極的に進められている。メール配信などITを活用し、予算面の制約を上手にクリアできている。国民のニーズや期待の大きい分野なので、さらに積極的な取り組みが期待される。サーチエンジンにヒットされやすい工夫が望まれる。	4.8	生物統計研究において、特定保健指導の評価が達成されている。生物統計研究において、食生活改善に関する研究成果が上がっている。アジア太平洋地域の栄養改善に対する貢献が大きい。研修事業やシンポジウム関係の実績が充実している。多岐にわたる実績が上がっているため、センターとしての活動のまとめ、コンセプトを明らかにする。	4.9	4.6
多くの基礎研究が行われており評価できる。マウスの研究を人にまでつなげて欲しい。研究途中のこともあるが、達成度が上がるように希望する。	4	分析精度の標準化、精度管理は重要な課題であるが、取り組みが適正に行われており、評価できる。関係省庁に対応する検討、調査研究が行われており、評価できる。今後も健康食品の機能性、有効性についての研究を継続し、情報提供することを望む。	4.5	非常に多くのデータを収集し、情報発信を行っており、評価できる。インターネット調査など新しい対応もされており、継続を望む。新しい情報提供の方法も取り入れられ、適切な対応が行われていることは評価できる。今後も一般の人達にも正確な情報提供の場となってほしい。	4.7	国際協力として多くの研究や研究者の受け入れをしており、少ない研究員の中、成果が認められる。日本人の健康・栄養状態をモニタリングする手法はまだ十分とは言えないように見えるので、引き続き行って成果を出してほしい。生物統計では特定健診、特定保健指導、栄養調査のデータが活用され、新しいデータも出ており評価できる。アジアの中での中心的な役割を担っており評価できる。	4.2	4.4
肥満の改善因子を栄養因子、運動から明らかにしている点は評価できる。ガイドライン作成の基盤を基礎から組み立てようとしている点は評価できる。研究者を育成することを目的として様々な研究を行っている点は評価できる。	5	大変な仕事を十分に行っている。他機関とも連携し十分信頼できる分析値となっている。	5	健康食品の安全性の日本の情報源としての位置を保ち続けている。情報を早く多く発信している。内側から見るとできる限りの情報発信をしているが、外側から見ると、まだ現在の現状をどうするか。	5	アジアを中心に国際的な研究協力を行っている。成果をもう少し明らかにしてほしい。アジア特にベトナムの栄養調査から日本の現状を考えることができるのではないかと。アジアとの連携は意義のあるものと思う。国際協力は一つ一つの意義づけを行うと良いのではないかと。	4	4.5
低炭水化物食が話題になり実践している人は多いです。今回マウスの実験では長期摂取において肥満改善傾向はなかったとの結果でしたが、ヒトではどうかを早く研究して欲しい。若い女性の痩せ、サルコペニア、方法論がまだ確立されていないとのこと、高齢者のサルコペニア予防対策のため早期確立して欲しいと思います。多くの人が関心を持って取り組んでいる低炭水化物食を評価して頂きたい。評価法の検討が必要という言葉が良く出てきますが、評価法が定まっていない段階での分析では、その成果はまた覆る可能性があるということですね。基礎研究はそれで良いと思いますが、聞いている側は不安になります。	3	食品成分分析の精度は評価できる。機能性食品をうたう食品のデータベースを構築し公開している。栄養表示義務化に向けた準備を進めている。薬用植物資源研究センターとのシナジー研究に期待します。基盤研との合併の成果です。信頼できるデータベースを公開しています。課題になっている機能性成分(健康食品)の有効性、安全性研究は迅速に対応をお願いします。健康障害を防いで欲しい。エソウコギの実態調査、機能性評価は興味深い。次から次へと出現する食品の成分に対応していくのは、ご苦労も多いと推察しています。	4	一日総アクセス数2,800件以上を維持するとの目標が実現している。健康食品の被害報告の実態調査に取り組んでいる。継続して欲しいです。HP、FaceBookまだ対応しているのは精力的に取り組んでいる結果ですね。ご苦労なことだと思います。アクセス数に驚きました。「子供にサプリは必要ない、まずは食事ですよ」といったはっきりした主張を伝えて欲しいです。情報過剰時代に売らんかなの商法にダメージを受ける人々をゼロにしなければならぬと思います。そういう人々は健康栄養研究所のデータベースにアクセスすることは少ないと思われます。また、アクセスしても理解するのが難しいと感じています。	4	生物統計として説明された内容は国際産学連携センターで担う研究なのかどうかと感じました。栄養疫学研究部との棲み分けはどうなっているのでしょうか。栄養疫学研究部との棲み分けが良くわかりませんでした。国際貢献事業として、アジア太平洋地域のネットワークの中で継続して、健康栄養問題の改善に寄与していることが良くわかりました。その結果を日本人の健康問題の改善に生かして頂きたいと思いました。日本の優れた研究成果を各国に照会してリーダーシップを取って欲しいと思いました。	3	3.6
	26.1		31.3		31.5		26.1	29.2

平成 27 年度国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所外部評価委員会  
健康・栄養研究分科会 委員長総括コメント(要旨)

1. 健康・栄養研究所は、非常に少ない人数で、事業的なことも論文的な研究も非常によく行われており、高く評価したい。しかし、研究所の経営陣は少ない人数で成果を挙げているという現状に甘んじることなく、きちんとしたPRをしながら、必要な人員を確保する、予算を確保する努力をすべきである。
2. 研究所全体がどういう方向へ向いているのか、研究所の長期戦略あるいは国の長期政策の中で各研究がどういうふうに位置づけられているのか、これらをもう少しわかる形で説明すべきである。それぞれの研究が研究所の一番のミッションである食とか栄養とかとどういうふうにつながっているかということを対外的にもきっちり説明すべきである。特に動物(マウス)を対象とする研究については、研究所全体の方向の中で、また各研究部の果たすべき役割の中で、位置づけを明確にする必要がある。それぞれの研究は研究者個人の発案に基づいて、いろんな多様性があることが基本であるが、最終的には栄養と食、あるいは研究所の長期戦略、国の長期政策の中のどこに位置づけられるかということもそれぞれの研究者が認識して進めるべきである。
3. 各研究の位置づけが整理できると、ブレイクスルーをして、この研究所がもう一段上のレベルに良くなる筈である。そのためには、戦略的な方向性の中で、集中と選択も視野に入れるべきではないか。限られた人員、予算の中で、6 研究部・2 センターという構成は多すぎるという意見もある。また、国立研究開発法人の中長期計画の自由度の中での集中と選択が難しければ、中長期計画そのものの変更ということも考えられるのではないか。
4. 健康・栄養研究所の中長期計画は7年間であるが、7年間の技術的な進歩、分析技術とかコンピューター技術とかの進歩は非常に速いので、そういう技術の進歩も柔軟に取り入れて、中長期計画の見直しも検討すべきである。
5. 研究者の人数が少ないことはやはり根源的な問題であるが、莫大に人数がふえるということは今の全体の制度の中では難しい。そこで外部の力を使う、協力をいただくという手法もあるのではないか。例えば、海外との共同研究の戦略を明確にすることにより、あるいは他の研究所、行政機関との共同研究により、研究資金を獲得できるのではないか。また、健康・栄養研究所の中で、それぞれの研究部の共同研究というものも必要ではないか、それにより、さらに効率的な研究ができるのではないか。
6. 研究成果をPRし、外部にプロモーションすべきである。積極的に伝えていくことをしなければ、研究を行う意味がない。特に健康・栄養研究所は、栄養研究の唯一のメッカといって良い施設なので、その存在価値をきちんと伝えるべきである。情報の伝え方として、正確な情報をまず専門家向けに出して、そこからさらに噛み砕いて民間の方へという話もあるが、時間が限られているようなもの、例えば、お子様のサプリの問題とか、低炭水化物ダイエットの話とか、時間的な余裕がないというようなときには、直接一般向けに情報を出すような道筋も考えるべきである。

【補遺】

「食育(栄養教育)」に関する委員からのコメント

1. 食育という国の政策は、必ずしも保健医療の領域だけではない。そこに、健康・栄養研究所として、「食育」というテーマで何を扱うかということの難しさがある。そこが整理できて初めて、栄養研究部としての研究がもっと精査されていくのではないかと。食育という結構複雑な政策を健康・栄養研究所が全部抱えることはできない。そういう前提の中で、栄養教育研究部を評価すべきである。
2. 食育は大きな問題であり、エビデンスも実はなかなかないし、エビデンスを構築しようと思ったら大変なことである。そこで、例えば、食育と糖尿病との関係とか肥満との関係とかいう現状を調査して、しっかりと把握し、その調査結果を公開して、一般の方々に還元していくということでも十分意味がある。情報を解析して伝えるということからまず始めるべきではないか。
3. 食育基本法が制定された背景の中で、食育を研究する部門を健康・栄養研究所の中に置くということ自体に意義があった。食育部門は、研究だけではなく、さまざまな要素が絡んで、常にやりづらい中でやっているということを実感する。
4. 平成 28 年 4 月から食育に関する総合調整が内閣府から農林水産省へ移り、国全体の食育の立ち位置というのが少し変わったということがあるのではないかと。食育に関するいろんな意思決定の中に、今までとは当然違う要素が入ってくるだろう。逆に言えば、農林水産省の素材を提供する方と、この栄養のところとうまく結びつくという期待感もある。

国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所外部評価委員会  
健康・栄養研究分科会委員名簿

委員氏名	所属機関名及び職名
伊藤 裕	慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科 教授
逢坂 哲彌	早稲田大学ナノ・ライフ創新研究機構 機構長
大谷 敏郎	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 理事
加藤 則子	十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科 教授
川島 由起子	聖マリアンナ医科大学病院栄養部 参与
近藤 和雄	東洋大学食環境科学部健康栄養学科 教授
下光 輝一	公益財団法人健康・体力づくり事業財団 理事長
三保谷 智子	女子栄養大学香川昇三・綾記念展示室 課長

※敬称略、五十音順

任期:委員の委嘱承認の日～平成29年3月31日(2年)